

川田順造編『近親性交とそのタブー—
—文化人類学と自然人類学のあらたな地平—』
藤原書店, 2001年12月刊, 241頁, 2400円

天田 琢也

1983年、スウェーデンにおいてインセストを刑事罰の対象として扱うとの規定が排除された。日本を含めいわゆる近代国家を見渡せば、これはかなり遅いと言わざるを得ない。虐待や暴力に結びつかない範囲においてはであるが、世の潮流としてインセストが一面において「禁」でなくなって久しいのだ。一方で、これが依然「禁忌」として働き続けているのも動かし難い事実である。現実問題としては言わずもがな、インターネットの普及によるその中での個人の幻想・妄想の表出の一つとしてインセスト、字面の上でより適切には「近親相姦」というテーマがある意味—ジャンルとして成り立っているのも、「禁忌」性が薄れつつあるからというよりもむしろそれが確固としてあるからということ、それらが「幻想」であるというまさにその事実によって示していると言えよう。

インセストは残念ながら、と言うべきか当然のことながらと言うべきか、通常の場合においてはなかなか話題にしづらいテーマである。しかし実際問題として日本においても先に述べた「虐待や暴力」と結びついたインセストの問題が顕在化し、増加傾向にあるとも言われている。ことは決して対岸の火事ではない。そのようななか、我々個人個人がこの問題に外面的にも無関心であり続けることはできないであろう。本書は直接的に現代社会の病理を取り扱うものではないが、インセストという行為・表象がもつ意味やその歴史、及び最新の研究成果等を幅広く盛り込んだ学際的論文集であり、このもととなった2001年4月の日本人類学会進化人類学分科会における「近親性交とその禁忌」と題されたシンポジウムの成果を一冊の書にまとめたものである。

本書の構成は以下のようになっている。

●川田順造（文化人類学）——問題提起に代えて

I [最先端の自然人類学・文化人類学の知から]

●青木健一（集団生物学）——「間違い」ではなく「適応」としての近親交配

●山極寿一（霊長類学）——インセスト回避がもたらす社会関係

●出口顯（文化人類学）——インセストとしての婚姻

●渡辺公三（文化人類学）——幻想と現実のはざまのインセスト・タブー

II [コメント・批判・あらたな問い]

●西田利貞（霊長類学）——インセスト・タブーについてのノート

●内堀基光（文化人類学）——インセストとその象徴

●小馬徹（文化人類学）——性と「人間」という論理の彼岸

Ⅲ [文芸の深みから]

- 古橋信孝（古代日本文学）——自然過程・禁忌・心の闇
- 高橋睦郎（詩人）——自瀆と自殺のあいだ

それでは各論文に添えられた副題とともに、以下青木論文から順に内容を概観してゆくことにする。

第一の青木論文の副題は「“進化した戦略”は兄妹交配の完全回避か？ それとも“低い確率で”それを行なうことか？」であり、当然主眼は後者、つまりきつい近親交配が低い確率で起こるように進化している可能性を検討することにある。その際、著者が近親交配の利点として挙げていることは、①自分の遺伝子のコピーをより多く受け継ぐことができる、②繁殖をより早期から開始可能となり生涯の繁殖成功回数が増す可能性がある、以上の2点である。著者はこれらの利点と「近交弱勢」、つまり近親交配によって生じた子の適応度が異性交配によって生じた子のそれより低い、という不利との関係性を検討するための、①に対する「番外交配モデル」、②に対する「早期繁殖モデル」という、著者が他所で作成検討した2つのモデルについて簡潔に述べている。また後半では、1891年に「幼少の頃からきわめて親密に育った人々の間に、性交に対する生得的な嫌悪が存在する」と述べたウェスターマークに触れ、さらにそこで近親交配回避のために作用している要因として注目されている、自己と非自己の認識に深く関わる分子である主要組織適合性複合体についても触れている。

第二の山極論文には「集団離脱（メイト・アウト）とインセスト回避の関係は、霊長類としての人類の進化過程でどう変容したか？」という副題が添えられている。メイト・アウトとは、集団をつくる霊長類の社会でどちらかの性が成熟する前に生まれ育った集団を離れることを指す。本論文の目的は、霊長類においては多くの例でメイト・アウトが結果的に近親間の交尾回避に貢献しており、その逆は少ないという事実と、「人間の社会では交尾回避（＝インセスト・タブー）がメイト・アウト（＝外婚制）を結果するようになった」とこととのねじれの起こりを検討することにある。そのために著者は様々な霊長類社会における実例を引きつつ、まずメイト・アウト、交尾回避のメカニズムを概説する。そしてこれらをもとに、交尾回避がメイト・アウトを結果しうるための諸要件を案出し、それをよく満たした社会を構成する霊長類であるゴリラの社会を取り上げ、交尾回避＝インセスト・タブーが持つ個体間・集団間における関係の多元化・重層化作用についての分析を行っている。

第三の出口論文は副題が「『すべての婚姻はインセストである』（レヴィ＝ストロース）」とのみあることが示すように、レヴィ＝ストロースのインセスト・タブーや婚姻についての論を再評価することが目的である。著者は一般的なレヴィ＝ストロースの連帯理論理解・解釈が、「身内」と「よそ者」という二事項の関係性についての配慮に欠けており、それらが一面的・固定的に捉えられすぎている風潮を、幾つかの一般書、論文などを引いて挙げている。つまり「再評価」とはレヴィ＝ストロースの言う「身内・よそ者」といった事項が決して単純な二項対立・二元論の関係にあるものではなく、互いに状況に応じて分節され、また相互に反転をするものであるということを示している。この点に関してのみ具体的に述べるならば、タブー、もしくはそれによって制限された婚姻そのものが、「身内」と「よそ者」という「差異」を生み出している、ということがその要旨である。また本論は以上のことに留まらず、インセストに関わる神話

について単純な直線的・停滞的などだけではない時間構造が存在することについても触れ、そうした見方への配慮を神話分析に求めて結びとしている。

第四の渡辺論文は「インセスト・タブーはネガティブな禁止（フロイト）か、ポジティブな交換の命令（レヴィ＝ストロース）か？」という副題であるが、本論はこの2つの正否を決するというものではなく、専らレヴィ＝ストロースの連帯理論とその周辺の概説が中心となっている比較的短いものである。また一方で本論は、フロイトについても主にレヴィ＝ストロースと対置する形で適宜挙げているが、彼の方に関しては著者は「幻想」として明らかに批判的な立場をとっており、フロイトの理論に見られる彼自信の願望をたどったクリュルの論（M.クリュル『フロイトとその父』水野・山下訳 思索社 1987）を「幻想」とする論拠として参照している。

第五の西田論文は主に先の四者らに対する「五つの批判と問い」を非常に手短かに挙げたものである。「一人間の『やらない』ことを、法律は禁止しないか？」これは青木が引用したフレイザーの言への反論であるが、著者はめったに起こらないが起こったら都合が悪い尊属殺人の禁止などを挙げてこれに反論している。「二 ローマ属領下でのエジプトにおけるインセスト」を青木が例として提示したことに対し、著者は資料に記された「兄妹」の実際上の意味の不確実性、さらには実際に性交が行われたかどうかについても疑問を投げかけている。「三 インセスト回避は『世話を受けた方が』おこなうのか？」は山極の言に対するもので、妊娠時の不利益などからして回避はメスが担うのではないかと著者は述べている。「四 インセスト・タブーは普遍的な習慣か？」とは、文化人類学全体への疑問であり、著者は日本におけるインセストに対する社会的反応の実際などから、普遍的なのは「インセスト回避」なのではないかと意見している。「五 インセスト・タブーは性交を断念することか？」とは、前者らにまみ見られた「断念」発言への批判であり、フロイトの「疑似科学」的理論を文化人類学がいまだに引き摺っていることを著者は批判している。

第六の内堀論文は「行為ではなく“想像”の対象としてのインセストがもつ“意味作用”」との副題、より著者の意図を明確にするならインセストは人類にとって「何よりも象徴」であるという考えのもと、それに関する二つのテーマから成り立っている。一つめに、主に親子に対応する「異世代間インセスト」が通常完全にスキャンダラスなものとして語られることに対し、兄弟姉妹におけるような「同世代間インセスト」が場合によっては肯定的な価値をもつものとして言い表されることがままあるという、年齢差による意味作用のギャップについて著者は触れ、こうした現象についての確認を経て、本質的に異なる幾種類かのインセストが同じ言葉でくられ、一括して扱われてきたことに疑問を呈している。二つめは、東南アジアにおけるインセストのもつ意味についての、神話・小話等をもとにした著者の「着想の覚え書き」を述べたものである。ここでは著者は、動物への嘲笑とインセストが同じく雷雨・洪水・石化という帰結をもたらすということから、視覚的には何の問題も有しないインセストという行為がもつ自然・文化の境界としての意味を、表層的なレベルで再確認している。

第七の小馬論文も直前の内堀論文同様実際的には二部構成となっており、副題は後半に関わるものである。本論は「人間とは観念だ」ということをもとに、その「観念」の成立理論を解明・再考するということが大枠である。その上でまず前半は先の出口の言へのコメントを通して、「人間とは観念だ」という思考をその中に確認している。さらに著者は出口の分節図をさらに拡張・細分化し、社会から「非人間」と称される者のもつ、秩序の再確認化・再創造作用が、インセスト

がもつ穢視・聖化の両義性の因であるとした。さらに著者は「非人間」的性関係がもつ死との強い繋がりについても、同一性と他者性という観点から一考を供している。一方で後半は「社会＝文化人類学の間人中心主義を批判する霊長類学における人間中心主義」の批判から言を進めている。ここで批判の対象となっている具体的事例は、類人猿に手話や文字板を使った会話を教え込む、ボノボのカンジなどでつとに有名な諸実験である。著者の言によればこれは「類人猿を『人間』に変換してしまった」ことなのであり、「野生の類人猿の内面やコミュニケーションの仕組みを何も明らかにしていない」。性をコミュニケーションの一手段として発展させたボノボを例にとるなら、我々はボノボに人間になる可能性を見るのではなく、人間性というものの新たな地平の可能性を見るべきだと著者は述べている。

第八の古橋論文は「恋人ときょうだい——親愛の情からみる家族の起源」との副題で、性と家族の問題を日本の古代文学において見るのが本論の中心となっている。まず著者はそこにおいては「イモ」という語が妹と恋人の二つを意味する語であることを挙げ、その背後に主に皇室において異母兄妹婚が理想とされていたことを見る。そして大祓祝詞において国つ罪とされるものの中にインセストが含まれるもの、解釈の問題でその範囲が曖昧であることを指し、性の禁忌が重要でありながら曖昧でもあるというこの事実注目すべきとする。これらを述べたうえで著者は他にも日本書紀や日本の仏教説話を引用して、日本の文学においてはインセスト等を描く際に心の葛藤といったものが希薄であり、そうしたものを負の面にはあるが有りうることとして受け入れてきたのではないかと述べている。

第九の高橋論文の副題は「アイルランド現代詩と『源氏物語』——“むすめを姦す父”とその息子の復讐」となっており、結びの文らしくこれまでのものと比べて一風変わったものとなっており、分量も8頁と少ない。論の前半は副題通りの内容であり、アイルランドの詩人カハル・オー・シャーキーのつづったある詩と、その約1000年前に地球の裏側でつくられた「源氏物語」との間の、インセストという事項をめぐる関係を述べている。そして後半ではインセストのはらむ範囲問題について軽く触れたものとなっている。

以上、かなり大掴みに各論文を概観したわけだが、主に全体の構成について、いくつか問題点等を指摘しておきたい。

まずは構成順序の問題であるが、本書はおそらくもともなったシンポジウムの発表者順に各論文が並べられており、その意味では順序の問題は仕方のないことではあるが、折角一冊の本として、シンポジウム非参加者に提示しようというのなら、そこに多少の配慮が欲しかった。具体的にはまず一つ、本書の見た目も内容も、学際的だろうという意図はどうあれ文化・自然の別で言えば「文化」的関心を持つ読者を想定しているように私には見える。最初の二つが自然人類学的であることは良いのだが、最初の論文で慣れない者にとっては一見ただけでは分かりづらいような集団遺伝学的記号式を提示し、条件とあいまいな仮説でそれを終えていることは、多少読者に疑問を残し、不親切ではなかろうかと思われる。構成についての二つめとして、第三・四の出口論文・渡辺論文であるが、レヴィ＝ストロースの一般的無理解への批判と彼の再評価を論ずる前者の直後に、内容的にレヴィ＝ストロース概論となっている後者が続くのは、若干奇妙なように感ぜられる。

次に本書を全体としてみた場合の問題であるが、論文集という性質上ある程度必然的に起こり

うるとはいえ、内容の重複がやや気にかかる。第一・二論文の両方においてウェスターマーク効果を説明する際に同じ実例を挙げていることや、コメントとそこからの意見の発展とはいえ、論文の分量に対し多少コメント対象の論文要約が占める割合が多い第二・七論文の関係などである。そこまで親切に構成せずとも、参照箇所を指摘しておくことで十分事足りると思われる。通常であればこれらは大した問題とはならないが、次に挙げることに関わって少々疑問が残る。

本書に収められた論文全体を通して言えると思われることだが、紙面の割には各執筆者が多く、このことに手を広げすぎて、個々の事例について説明等が不十分であるという状況に陥っていることがままある。私個人としても非常に興味を引かれる視点がいくつかあり、そうしたものを個人が一人で著す書よりもはるかに多く提供できるということは、論文集の、さらには本書のように「手を広げすぎて」いることの有する利点であり、それは一面で全体として非常に有効な構成法であると言えるが、前に挙げた重複事項の削減などにより少なくとも各論文の主たる事項についてのみでも構わないのももう少し詳しい説明があってもよいと思える箇所がいくつかあった。

さらに、第五の西田論文に至っておそらく読者がまず感じるであろうことは、そこで挙げられた疑問・批判に対する前四者らの反応の如何についてであろう。四つめの疑問については古橋論文が根拠の裏付けの役割を果たしているのだが、解答自体はなされていない。もちろん、前者らの反応があればまた西田からの反応が生じ、紙面の関係上都合が悪い状態に陥るであろうが、西田論文の分量上、当事者たる前者らの反応ぐらゐは載せてしかるべきであろう。

問題点の最後として、本書がインセストをめぐる「文化人類学と自然人類学のあらたな地平」を探るための文化人類学会における成果である以上、執筆者に文化・自然人類学者が多くを占めるのは当然であり、必要なことではある。一方で青木が指摘しているように「インセスト・タブーの成立については（中略）社会・文化的な諸説のほうがむしろ多い」のであるから、他分野からも幅広く意見を求めざるを得ないことは指摘するまでもないことである。この意味で最終二論文に「文芸の深みから」として他分野からの言を持ち込んだのは全く正当であり、この二つはそれ自体として非常に興味深い指摘を行っているわけだが、ことインセストの問題に関してはやはり社会学や心理学等における研究成果、さらには冒頭で触れたように過去や表象としてのみではなく今の現実としてどうあるかということが気にならざるを得ない。これは本書及びシンポジウムの問題点と言うよりは、今後への期待である。

以上挙げたこれらの問題点は議論の本質に関わっていないとの批判があるだろう。確かに私は本書の様々な場面で学問的には門外漢であり、実際には勉強させられることばかりであったわけで、こと個別事項に関しては十分な根拠と自信を持って正当な批判が行えるか多少疑問が残る。だがそのおかげもあってかたや一般読者の視点に近いところで初読できたのであり、上に挙げた諸指摘はそうした立場に立った上での視点も含まれている。文化系の学問分野に携わる者にとって、自己の社会的意義や社会的貢献法について考えたことのない者はおそらくまい。その中で一つの主たる貢献手段である書籍の出版一つとっても、より社会への普及を果たせるよう、常に消費者＝読者の視点を持ちつつ、書籍を構成すべきと主張し、また実行するのも、今の時代正当であり必要であると感ぜられる。

最後に、私の関心対象たるギリシア神話において、本書で幾度となく持ち出されたオイディプス以外のインセスト物語も持ち出して、それらと本書で提示された論のいくつかを照らし合わせ

てみることで全体の締め括りとしていたい。まず、内堀論文において指摘された同世代間インセストと異世代間インセストの語りに見られるロマンスとスキャンダルの差についてだが、内堀は前者について「じっさいに身体的な性交の遂行が話題になっているかどうかは別」としているが、「それに対して、親子のあいだの性的な交渉は…」というように後者についての説明を始め、そのスキャンダルの例としてオイディプス物語を挙げているわけだが、前者の「実際の性交渉は別」という基準を後者にも適用し、両者の条件をなるべく擦り寄せた上で、それぞれに対してギリシア神話中の例を挙げるとするなら、前者にはポリュネイケスに対するアンティゴネ、そして後者にはエディプスコンプレックス女性版の名親としても知られる、アガ멤ノンに対するエレクトラを挙げるのが適切であろう。どちらの場合にもその情の対象者は既に死んでいる者であって、それゆえ実際の性交も、さらには性的関心の表明すらなく、強い親密さという面のみが表れている。ソポクレスにおいてこの両者を見る（『アンティゴネ』、『エレクトラ』）限り、前者は言わずもがな、後者においてもその「親密さ」はスキャンダラスな印象を与えるものではないだろう。もちろん両者は結末の違いによって親密さの印象に相当な差異があるわけだが、ここから「兄弟姉妹間の親密さというもの」の方のみが「ロマンス的センチメントをともなって語られる可能性のないし方向性をうちに秘めて」いるわけではなく、親子間の親密さにも「そのかぎりにおいてではあるが、彼らのあいだの性的な関心、あるいは惹きつけあいですら肯定的な価値をおびて現れうる」可能性を引き出すことも、あながち無理とは言えないだろう。もっとも、大勢としては著者の言通りであろうことは認められる。

もう一点、小馬論文においてインセストと死との繋がりが論じられた際に、ここでもオイディプスを例にとり、「インセストを犯した男女の中で常に女性が死ぬべき者」となり、「男性は死を生きることによって死を引き受ける」とあった。ここに多少私なりに思ったことを付け加えておくと、この図式はある意味でその結果生を受けた子供にも当てはまるかもしれないと思われる。オイディプスの二男児エテオクレスとポリュネイケス、ミュラの子アドニス、テュエステスの子アイギストスの計四男児は、「死を生き」ているかどうかは様々であるが、とりあえずは自ら進んで死んではいない。対してオイディプスの二女児のうち、良く知られるようにアンティゴネについては、イオカステ、ミュラ、テュエステスの娘の三者同様、自ら進んで死ぬという面もっている。以上のことはここに出した例だけでは、その絶対数も男女の対象関係も十分ではなく、さらにはのこり一女児イスマネという穴もあるため、これだけではただの思い付きにすぎないが、発展させる余地はあるであろう。